［連載］第38回　清々しき人々　月尾 嘉男（東京大学名誉教授・工学博士）

生涯を東北地方の記録に献身した旅人

菅江 真澄

菅江 真澄（1754-1829）

旅行が急増する時代

二一世紀になり旅行が急増しています。世界全体の国外旅行者数は一九九五年には五億二五〇〇万人でしたが、二〇一八年には一四億人と二・七倍になっています。仕事のために頻繁に旅行する人々もいますが、平均すれば五人に一人は国外旅行をしていることになります。日本は一九九五年の一五〇〇万人から二〇一八年には一八九五万人と一・三倍の増加で、世界の傾向よりは増加が低率ですが、それでも毎年七人に一人は海外旅行をしています。

これは空路や海路の移動手段が発達したことにより旅行しやすくなったこと、通信手段の進歩により事前の予約が簡単になったことも影響していますが、一部の地域を例外として旅行が安全になったことの効果です。とりわけ日本は安全と評価され、内戦、殺人、治安など二四の指標で評価する世界平和指数によれば、アイスランド、ニュージーランド、ポルトガル、オーストリア、デンマークが上位ですが、日本も九位に位置しています。

これは最近だけではなく、江戸末期から明治初期になって外国から人々が到来するようになった時代にも同様で、イギリスの女性I・バードが通訳の男性一人のみを同伴して江戸から蝦夷まで旅行し『日本奥地紀行』（一八八〇）（図1）を出版していますが、そのようなことが可能であった日本は当時の世界では例外でした。その日本の江戸時代後期に、故郷を出発してから人生の大半を旅行していた菅江真澄という旅人を今回は紹介します。

図1『日本奥地紀行』（1880）

出発直後に巨大噴火を経験

真澄は一七五四年に三河国渥美郡牟呂村字公文（豊橋市牟呂公文町）に白井秀真を父親、千枝を母親として誕生しているとの伝聞があります。本名は白井英二でした。真澄は生涯に膨大な記録を執筆していますが、自身についてはほとんど記述がなく詳細は不明です。しかし、幼少の時期には地元で和学や和歌を勉強し、一五歳頃から一〇年間ほどは尾張藩薬草園に勤務し、この時期に漢学と画技、さらには薬学や医学も習得したとされています。

人生後半に発揮した多才な能力からすれば優秀な若者であったと推察され、二七歳頃には岐阜と滋賀の県境にある伊吹山麓に薬草採集に出掛けたという記録もありますが、尾張藩内ではその能力を発揮する場所が見出せず故郷の渥美に帰還します。しかし母親が死亡したことを契機として、三〇歳になった一七八三年（天明三年）二月に故郷から出奔します。どのような事情かは不明ですが、終生、故郷に帰還することはありませんでした。

最初に目指したのは豊橋から飯田街道の中心都市の飯田を経由した宿場の塩尻でした。真澄が塩尻に滞在していたとき、五五キロメートル北東で江戸時代でも有数の事件が勃発しました。活火山浅間山の巨大噴火です（図2）。四月以後、何度も鳴動を繰返していた火山が八月四日から翌日にかけて大火砕流を噴出したのです。北麓の鎌原の村落は一八〇戸すべてが熱泥に埋没し、村民の八割以上が死亡するという惨事になりました。

塩尻に滞在していた真澄は宿場を通行する旅人から噴火しはじめている様子の情報を入手していましたが、八月四日の夜半になって轟音とともに、山並みの彼方に巨大噴火の噴煙を眺望しています。その体験を真澄は『伊那の中路』という日記に、神棚の徳利や小鉢が落下し、土壁が崩落するなどと記録しています。現地では熱泥が河川を堰止めたため洪水となり、流域に点在する七五の村落を壊滅状態にする被害が発生していました。

このような周辺地域だけではなく、巨大噴火は日本全体に被害をもたらしました。日本近世最大の冷害「天明の飢饉」です。上空に拡散した火山の噴煙が太陽の日射を遮断し、全国に冷害をもたらし飢饉が発生したのです。とりわけ東北地方の被害が甚大で、弘前藩内では約八万人、八戸藩内では約三万人、盛岡藩内では約七万五〇〇〇人が餓死したとされ、全国では飢饉の影響により人口が九〇万人以上も減少したと推計されています（図3）。

図2 浅間山大噴火（1783）

東北地方を旅行

翌年の一七八四年七月に、真澄は塩尻を出発して北上、信濃と越後の境界にある関川の関所を通過して日本海側に到達します。それ以後は柏崎、三条、新潟、村上などを四〇日間かけて移動し、九月に出羽の庄内に到着します。この時期については真澄の旅行の記録が発見されていないので詳細は不明ですが、約一〇〇年前に芭蕉が酒田から新潟まで移動したときの日数が一週間強でしたから、各地に何日も滞在した余裕のある旅行でした。

庄内地方には二週間強の滞在でしたが、出羽修験の霊場として名高い出羽三山や酒田街道の集落の様子などを絵入りの日記

新刊
新・医者が学んだ祈りの力
完璧な「自然治癒力」・免疫力を「千島学説」で解く

自然治癒のパワーを細胞に取り込む生き方
小松 健治［著］「あうん健康庵」庵主・総合診療医
「あうん健康庵」とは――
人間に完璧に備わっている「自然治癒力」・免疫力を尊重し、
日常生活即医学ととらえた自助療法を主体とした総合診療医院
四六判　並製　208ページ　本体1,800円＋税　ISBN978-4-902443-52-3 C0095
●本書の内容●
バクテリアの自然発生像を観察して／「自然治癒力」と「こころ」の病／がんと闘うか、共生するか／末梢血液循環と、地球の富の分配機能はそっくり／「ケトジェニックな生き方」と「千島新血液学原理」／千島博士の「氣・血・動の調和」を"ナンバ"で極める／「死は生の契機なり」、「死生観」を「千島学説」に学ぶ、など
遊行社　〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 5-5-1F　TEL 03-5361-3255
http://yugyosha.web.fc2.com/

朝倉書店
伝統ゲーム大事典
子供から大人まであそべる世界の遊戯
［著］高橋浩徳
■すごろく，将棋，バックギャモン（盤双六），ドミノ，チャトランガ，センテニアル，マンカラ…日本および世界各国で古くから遊ばれてきた伝統的なゲーム242種を紹介．
■ゲームごとにルールを解説し，札や盤面の図解も示して実際に遊べるように記載した．
［内容］盤のゲーム：本双六，将棋，チャトランガ，他／札のゲーム：百人一首，ドミノ，他／賽子のゲーム：チンチロリン，ジャックポット，他／動作のゲーム：投扇興，野球拳，他／運動のゲーム：蹴鞠，バンノック，他／言語のゲーム：殺人鬼，ディクショナリー，他／飲食のゲーム：闘茶，他
B5判 320ページ 定価（本体7,200円＋税）
ISBN978-4-254-50030-1
〒162-8707 新宿区新小川町6-29
TEL.03-3260-7631 FAX.03-3260-0180
http://www.asakura.co.jp/

石牟礼道子全歌集
海と空のあいだに
◆町田康氏絶賛
解説　前山光則
石牟礼文学の出発点を示す短歌群。一九四三～二〇一五年に詠まれた六七〇余首を集成。豊饒な文学世界の全容を解きあかす。　2600円
雪の辻ふけてほうほう灯りくる
老婆とわれといれかはるなり
《開海舟没後121年》
勝海舟から始まる近代日本
浦辺登　近代史の複雑な人間関係を海舟・西郷隆盛・横井小楠を起点にした人物相関図から読み解く。　2000円

石牟礼道子〈句・画〉集
色のない虹
〈新刊〉解説・岩岡中正 1900円
おもかげや泣きながら原は
色うすき虹
最晩年の2年間に遺したことば
俳句と自句自解、水彩と鉛筆画
弦書房　福岡市中央区大名 2-2-43-301　◆価税別
☎092(726)9885 FAX092(726)9886

『秋田のかりね』に詳細に記録しており、当時の風俗の貴重な資料となっています。九月後半になって酒田から吹浦を経由して有名な象潟に到着します。当時の象潟は「八十八潟九十九島」と賞賛され、松島と双璧をなす名勝でしたが（図4）、真澄が訪問した二〇年後の象潟地震により海底が隆起し、陸地になってしまいました。

象潟から日本海沿いを北上して本庄に到着し、そこから右折して内陸に方向転換して柳田という村落に宿泊しますが、ここで越年して約五カ月も滞在します。この南側に小野という村落がありますが、ここは平安時代の有名な女流歌人小野小町の生誕の土地とされており、『小野のふるさと』という日記に小町伝説を詳細に紹介しています。この付近には年間産出量日本一を何度も記録している院内銀山があり、そこも訪問しています。

五ヶ月間も滞在した柳田を一七八五年四月に出発、内陸の羽州街道と角館街道を通行、横手、大曲、角館を経由して、秋田に到着します。秋田からは男鹿半島の先端を周回して日本海沿いに北上し、八月に藩境を通過して津軽に到達します。その時期の津軽は前述した領民の三分の一近くが餓死したとされる天明の飢饉の最中にあり、道端には餓死した死体が放置されたままの状態で、その惨状は日記『外が浜風』に記録されています。

しかし、この天性の旅人の旅行は停止することなく、津軽から南下して南部藩内、仙台藩内を旅行し、有名な松島は三度も訪問しています。一七八八年になって再度北上し、津軽半島の北端にある字鉄から津軽海峡を横断して蝦夷の松前へ渡航します。蝦夷では渡島半島の海沿いを移動して、約四年間滞在し、一七九二年一〇月に松前から下北半島の先端の大間に帰還します。下北半島にも約二年半滞在し、その見聞は八冊の日記に記録されています。

一七九五年になって下北から弘前に移動し、そこで藩校の稽古館採薬係に採用されます。前述のように尾張藩薬草園に勤務していた経験を注目され、薬草の発見を期待されたためで、領内の山野を探査していたのですが、隣国南部との境界付近を探査していたことから日記を押収され、一時は身柄も拘束されたのではないかという推測もあります。そのような経緯から、一八〇一年に約六年半も滞在した津軽から終焉の土地となる秋田に移動しました。

図3 天明の飢饉（1780年代）

図4 象潟地震（1804）以前の象潟

秋田で地誌を作成

秋田に定着したものの、旅人の精神は劣化することなく、秋田の全域をくまなく旅行し、記録を休止することもありませんでした。五八歳になった一八一一年、ようやく秋田の城下に定住することになりましたが、これで旅行人生が終了したわけではありませんでした。秋田藩主の佐竹義和に謁見したとき、出羽六郡の地誌の作成を依頼されたのです。地誌とは地域の自然、気候、人口、交通、産業、歴史、文化などを記録する書物です。

地域の基礎情報であるとともに、各藩にとっては機密情報でもありますから、それを地元出身ではない旅人に依頼するということは、その能力を評価されるとともに人格を信頼されていた証拠です。真澄にとっても、これまでの蓄積を発揮できる格好の仕事でした。当時の平均年齢からすれば、すでに高齢でしたが、天職を下命された気分で、各郡を旅行して詳細に調査し、未完ではあるものの全四六巻の地誌を作成しました。

図5 菅江真澄の墓

角館で客死

真澄は一八二九年に内陸の角館で逝去します。七六歳でした。遺骸は秋田から引取りにきた友人たちによって雄物川を舟運で輸送し秋田に到着しました。これが真澄の人生最後の旅行でした。真澄はいつも黒色の頭巾をかぶり、生涯はずすことはありませんでした。秋田藩主に謁見するときも頭巾のままでなければ面会しないと主張し、葬儀のときにも弟子が頭巾をはずそうとしましたが、旧知の老人たちが阻止し、頭巾のままでした。

真澄は発見されているだけでも生涯に二〇〇巻にもなる著作を記述しており、いずれも彩色された挿画と文章で構成されていますが、自分の感想や意見は排除した事象の記録だけという抑制された内容です。家族もいない自分の人生の歴史も秘密にしていたのと同様、自分の内部の精神も秘密とし、当時としては十分な記録のない東北地方の庶民の生活を正確に記録することを自分の使命としていたのではないかと想像されます。

真澄は稀人として秋田では尊敬されており、病気になったのは地誌の取材に出掛けていた梅沢（田沢湖町）でしたが、角館に移送されて死亡したとされています。秋田に移送された遺骸は友人の神官の鎌田正家の墓域に埋葬され、三回忌のときに墓碑が建立され、弟子の鳥屋長秋による長歌が刻字されています。この菅江真澄翁墓は一九六二年に秋田市史跡第一号に指定され、二〇一四年には秋田県指定史跡になっています（図5）。

＊

『おくのほそ道』の冒頭「月日は百代の過客にして　行きかふ年もまた旅人なり（中略）古人も多く旅に死せるあり」は旅行の真髄を表現した名言です。現代の旅行でも危険はありますが、水盃が象徴するように、江戸時代以前の旅行には覚悟が必要でした。現代の人々が西行法師や松尾芭蕉に魅了されるのは、この覚悟を実感するからです。柳田國男は真澄を「日本民俗学の開祖」と称賛していますが、それ以上に旅人としての姿勢が真澄の真髄です。

つきお　よしお
1942年生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』（講談社）、『縄小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は恐いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『清々しき人々』（遊行社）。

月刊新聞『モルゲン』を定期購読しませんか？

モルゲンは先生と生徒が共有する、読書を柱とした新聞です。
生徒会担当教諭、図書館担当教諭、進路指導担当教諭を通して学校に配布しています。読書や社会情報を通し、子どもたちの視野を広げ、みずから社会の一員である自覚と、ものごとを客観的に見、聞き、考える目と心を育てることを目的としています。

● 媒体種別：月刊紙（毎月1回発行 ※7・8月は合併号）
タブロイド判 12～20ページ
● 読者対象：中・高・大・専門学校生、小・中・高校教諭

全国の中学・高校、図書館・青少年センターなどの諸施設
大学・短大・専門学校・サポート校、個人購読者など、
教育現場や公共施設などで活用されています

購読費（年間購読）
＊年度途中の申込可、送料込＊

300円×11回×消費税
年間11回発行 7・8月は合併号
↓
3,300円（税別）
＊一部売りは500円（税別）

★購読費を県費でお支払いいただいている学校さんもあります。県への依頼送付書などはこちらでご用意できますので、ぜひご相談下さい。

【お申込み・お問い合せ】モルゲン編集部　TEL 03-5361-3255 FAX 03-5361-1155 HP http://yugyosha.web.fc2.com/